国語科より

【古文（高１もしくは高２）】

１．ご用意いただくものと配付するもの

①予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

□**プリント（お帰り問題）を整理・保管するためのもの**

：ノート（A4サイズが便利）・バインダー・クリアブックなど

毎週 B5 のプリントを 2 枚（1 枚は書き込み用、もう 1 枚は保存用）配付します。それを適切に整理・保存する方法を自分で考え、実践してください。例えば、ノートを縦書きの向きにし、上のページにプリントを貼り、その余白や下のページにメモ・正しい訳を書き込んでいる生徒がいました。あるいは、穴をあけ、バインダーにはさみ、メモはルーズリーフに取る人もいました。

□**筆記具**：**鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、ペン、マーカーなど、お好みのもの**

授業の板書をそのままの色で写すためには、蛍光ペン（黄色）、ピンク・オレンジ・青・緑のペンが必要ですが、全てを合わせる必要はありません。

□**辞書**：**古語辞典**(電子辞書やスマートフォンのアプリ・サイトの利用も可)

授業中には使用しません。宿題実施の補助としてのみ必要です。

②**Gnoble** の授業内で配付されるもの（α・α１同一教材です）

□**通常授業テキスト**：04-1、05-4、09-1、10-4、11-1 の授業内で配付

□**古文単語帳**：04-1 の授業内で配付（年度途中合流者は合流時配付）

□**季節講習テキスト**：季節講習直前1ヶ月間の通常授業内で配付[事前に予習（全訳）が必要]

□**お帰り全訳演習プリント**：授業最後の演習、翌週までの添削、翌週授業での解説で使用

□**授業定着プリント**：授業で扱った長文の現代語訳や文法事項の確認（復習に利用）

□**復習問題**：年度後半（12 月度・3学期）の授業内で配付、過去学んだ内容の確認

２．授業の進み方と日々の取り組み

①授業の進み方

▼古文の授業の流れ

前回の全訳演習プリント、返却と解説① ⇒ 古文単語学習② ⇒ 宿題の解説③ ⇒ お帰り全訳演習④

＊12 月度以降には、過去扱った内容の定着度確認の「復習問題」も実施。

＊3学期には、お帰り全訳演習の代わりに入試問題を演習。

・前回の「全訳演習」（プリント）、返却と解説①

担当者が得点をつけ、返却します。添削はあえてせず、誤っている箇所の指摘のみをした状態で返却するので、授業内で不明点・疑問点を解決しましょう。解説では黒板に本文を書き出し、ポイント部分を全て色分けして、一語一語を疎かにしない緻密な解釈を提案します。ただし、講師が一方的に解説するだけではなく、どうすれば正しい解釈になったかを各自に考えてもらうようにする、「説明し尽くさない解説」を心掛けています。

文法に関する発問も頻繁にすることを通じて、長文の中で文法知識を理解・定着させることを目指しています。

授業を最大限に活かすには、自分が指名されているときも、そうでないときも、当事者意識を持

ち、主体的に参加することが期待されます。

・古文単語学習②

オリジナルの「古文単語帳」を使用し、 毎週7つずつをメドに解説していきます。 どういう漢字をあてるか、 どういう語源・イメージが存在するかを解説しますので、 単純暗記にならないように工夫しましょう。

・宿題の解説③

お帰り全訳演習と合わせ、宿題テキストを読み解くことで、演習量・読書量を確保しています。有名出典に触れ、古文の背景知識・常識などを活きた形で学べるように授業を展開します。

・お帰り全訳演習④

標準的な実施時間は、15分程度です。納得いくまで取り組んでもらい、提出してもらって授業は終了です。前期は助動詞活用表や過去のノートの参照も許容します。「来週の解説を聞けばいいや」と投げ出さず、どうすれば解決するかを自分で考える姿勢を確立してほしいと思います。毎年、粘る子は伸びます。機械的で、応用のきかない形で暗記をするのでなく、実際に使いこなす中で古典文法をマスターできるからでしょう。難しい課題ですが、答案提出時「どうしてこんなにできないのだろう」と悩み、落ち込んだり悔しがったりする体験も重要だと考えています。

②日々の取り組み

▼宿題と復習

▽古文の宿題

集中して取り組めば、15分程度で終えられる程度の全訳を宿題にしています。（お帰り全訳演習よりも難易度は低めです。） 原則として訳していく最中には辞書は用いずに取り組み、最後の最後で、自分のメド付けは正しかったか確認する程度にしましょう。古文の場合、どこかで訳を調べ、宿題をやった体裁だけを整えるということもできてしまうかもしれません。また解決法として辞書を引くことも重要ですが、調べると該当部分がそのまま出ていることもあるでしょう。それを「ラッキー」ととらえるか、意味がないと考え、多少時間をかけてでも、自分なりの訳を模索するか。後者を選び、果敢に挑む姿勢が、初見の古文でも読めるようにするには重要です。

▽古文の復習

古文の復習は、理解度や復習にかけられる時間に応じて、以下の3段階の方法を提案します。

①簡単な復習

授業を集中して聞いていれば、授業を受けた日の寝る前、翌週の授業開始前の時間などに、「復習用の白紙プリント」を眺めるだけでも十分に意味があります。「あれっ、この部分は何だったっけ？」と感じた部分に付箋を貼るなどしながら読み返し、書き込み入りの授業プリントの方を見て疑問点を解決します。1 回音読しておくと、単語や文節の区切り目などが意識化されて、より良いでしょう。

②授業定着プリント

授業時に配付している、授業定着プリントを実施します。文法や単語の観点から、復習ができるようになっています（解答は配付していません。授業中のメモをもとに答え合わせをします）。授業中、理解できていなかったり聞き取れていなかったりした部分が見付かったら、担当に質問しましょう。

③訳し直し

お帰り全訳演習やテキストの本文をもう一度全訳します。この「訳し直し」は、夏休みや冬休

み、年度末などの機会に行うのも効果的です。高校1年生には、2年生の1年間を使って、じっくり訳し直し・復習を行うよう提案しています。

（参考）受験科目「国語」の特質と長期的展望の必要性

大学受験の一科目として「国語」を見たとき、注意しなくてはならない点は、大学により求められる力が大いに異なるということです。そもそも、国語が受験科目に存在するかどうかということ自体、大学によって差があります。

たとえば、国立理系志望の生徒の場合ですと、

- **東大**・・・・・・・・・理系でも二次試験まで必要(現代文・古文・漢文の記述)
- **東工大**・・・・・・・二次試験、国語無し。共通テストでは受験するが、共通テストは第一段階選抜のみに使用するので、併願の私立大学等を踏まえても、国語の重要性が著しく低い
- **国立医学部**・・・二次試験に国語があるところは東大・京大・名古屋大・山形大のみだが、共通テストで高得点が必要である

というように、志望校によって国語の必要状況に差があることが分かります。

同じように、現代文・古文・漢文という3つの区分に関しても、選択問題・記述問題という形式に関しても、どこまでの学習が必要であるかは大学によって異なっています。受験技術的な話ばかりするのは我々も好きではありませんが、国語の受験勉強に関しては、志望校が固まり次第、受験科目として国語がどのように必要であるかを調べることが相当に重要です。

こうした入試制度に鑑みた上で、グノーブル国語科では、高校生活3年間の国語学習に関して、以下のような学習スケジュールを提案しています。

高１・・・古文［春期講習からの通年講座、１年間完結］

高２・・・現代文［春～１２月］（文系、東大・京大志望の理系）

古文（高１で未履修の者）［春期からの通年講座、１年間（もしくは春～１２月）完結］

※講習に「漢文」開講(高１・２の夏・冬のどこかで受ける)＋応用問題演習の「高２　３学期漢文特別講座」

※高２の１～２月に「古文特別講座」（高１・２で「古文」未履修の者向け速習講座）開講

高３・・・志望校別の対策［春期講習から直前講習で完結］

東大国語、難関国語、私大国語、小論文・医学部小論文

※難関国語は京大・一橋大・阪大・東北大・筑波大・お茶の水女子大など、２次試験に記述の国語を課される大学を受験する生徒向けの講座

※私大国語は早稲田大・上智大などの私大文系学部を受験する生徒向けの講座

※小論文は新高３（高２）冬期講習などで入門授業「小論文 prime」開講

※夏期講習と冬期講習に「共通テスト国語」開講

学校で、理科・社会の範囲履修があまり進んでいない高1のうちに、通年で「古文」を受講し、古文の学力を完成させるスケジュールが理想的だと考えています。そうすれば、高2の間に、現代文の実戦演習や理科や社会の勉強に着手する余裕ができ、現役合格の可能性が高まります。

いずれにせよ、高3になって慌てて古文・漢文の学習に手を着けるようでは、十分な学習時間を確保しにくく、成績を上げるのもなかなか難しい、という事実はお伝えしなくてはなりません。どのような方法で勉強するにせよ、入試に国語が関わる（関わりそうな）場合は、高2までに古文・漢文の基礎学力を身に付けることを前提にお考えいただければと存じます。